

2009年1月22日

2:43

前回話したが、この授業では西ヨーロッパの中世をキリスト教の支配力が強かった時代と捉える。そしてその上でキリスト教徒政治思想とのせめぎ合い、相克関係を検討しようとしているのだ。とすると、キリスト教という宗教がそもそもいかなるメッセージを配信しているのか。そのことを改めて認識して、その上で政治思想的なインプリケーションを考えてみる必要があると思われる。キリスト教というものは聖書というテキストがある宗教であるので、今回は聖書のメッセージを政治思想研究という観点から考え直したい。そして、そのときに政治思想研究という観点からこの聖書を読み解くときに、まず出てくるのがこの共同性の主張である。

I 「共同性」の主張

- A 共同性：人間は他者（神／他人）と共存すべき存在
 - ← およそ宗教なるものに共通？
- B 共同性の契機、その現われ方 一 ——啓示観の問題——
 - 1 他者（神もしくは他人）との共存を教える神とそのメッセージ
 - 啓示をとおして知覚可能
 - 2 啓示の形式：言葉&歴史上の事件を介して（誰もがアクセス可能）
 - Cf. ギリシア（⇔ ヘブライズムの特色としての「具体性」）
 - 3 カリスマ共有の促し：礼拝共同体形成へ（神がかり的な個人の否定）
- C 共同性の契機、その現われ方 二 ——王政批判——
 - 1 宗教的・政治的ユニットにおける「単独者」の否定（神の意図は理解容易だから）
 - 2 例 初期：王国形成(BC1006-BC587)とそれへの批判
 - 盛期：ダヴィデ契約
 - ・ 率先して神の戒めに従うべき王 ⇔ 近隣オリエント諸国の範

先生は、まず何が出てくるかという、それは聖書が読者に神と人、及び人と人の共同性を大事にせよ。そういうメッセージを発信していくことが重要だと思う。これが聖書というテキストを政治思想的に読み解く上で重要であると思われる。

前回も説明したが共同性といった。簡単に言えば、およそ人間というものは他者と共に生きて行くべきだ、生活していくべきだ、共存すべきだ、共生すべき存在なのだ、というメッセージを聖書は発信しているということだ。そしてその場合の他者は何人も人間に限定する必要はない。人間にとっての最大の他者である神もそこに含まれている。ただし、今言ったことに関して次のような疑問を抱く人がいるかもしれない。それは、「およそ宗教というものは人々が共に平和に暮らしていくことを重んじるものだ。だとすると争いがちな人間に対して一緒に生きて行くことの尊さを教え込ませるのが少なくとも宗教の社会学的な機能ではないのか」。そうだとするならば共同性というものを聖書的なメッセージというように特別に重んじる必要はないのではないかという疑問を抱くかもしれない。

およそ宗教というものが共同性を重んじる、これは先生も認めるところ。しかし、聖書というテキストは、例えば共同性というメッセージの発信の仕方、そしてその帰結において、やはり他の宗教ではあまり見かけない特徴があるように思える。その興味深さを以下で説明する。

確かに共同性というメッセージを発信しているのは聖書の宗教、聖書を聖典として重んじている宗教だけではない。しかし、聖書の宗教は、メッセージの内容以上にそのメッセージを誰が発信しているかをも問題にしている。では聖書においてメッセージを発信するのは誰か。これはいうまでもなく神様である。ヘブライ語ではヤハウェと呼ばれる神様である。日本語の聖書では主と書かれている。しかも、この神様は聖書の宗教において絶対的な神だとされている。いわゆる唯一神、絶対的な神様といわれている。結果、この聖書の宗教は非常にハードコアな一神教というように言われるのである。となると、次の問題が出てくる。そういう絶対的な神が、人というものは他者と共に生きて行くべきだ、人と人・神が共存することを大事にせよと教えている。しかし、そういうメッセージを発信して止まない神を人間はどうやって知覚できるのか。今問題にしているのは絶対的な神である。その絶対的な神のメッセージというのを、能力に限界を持っている人間がどうして知ることが出来るのだろうか。こういう絶対的な神と、その神のメッセージに対する人間側の受け止め方、そういう問題に直面したときに、聖書の宗教を信じる人々は啓示ということ意識するようになる。今啓示というキーワードが出てきているが、これを広辞苑に示すと、表し示すことなんて意味で出る。つま

り、本来人間の理性でフォローできないはずの神という絶対的な存在のメッセージがある。しかしそれは本来人間の限界ある理性ではフォローできないはずだ。しかし、この聖書の宗教においてはそういう本来人間がフォローしきれないはずの存在・メッセージを神自らが人間に示すということをこの宗教では重んじている。それが啓示である。この聖書に見られる啓示がユニークなのは次の点にある。つまり、この聖書宗教の啓示論においては、本来人間の理性でフォローできないはずのものが、誰にでも理解できる言葉を持っているということである。あるいは、誰の目にも見て取れる、歴史上の出来事、事件を通じて人間に示されている。この宗教はこのような啓示観を有している。言い換えると誰でもアクセス可能な言葉や出来事を介して、神がその意志を示す、それが聖書の想定している啓示である。

例えば聖書において啓示というものをイスラエル民族に説明してみせるのは、預言者といわれるような成人男性だけではない。当時の古代の地中海世界においては一人前の人間というように女性は見なされなかった。しかし聖書の記述を見ると、女性が何度となく神がなした技、そしてその意味を説いて回っているのである。そういう記述もあるのだ。そのくらい聖書の宗教の啓示というのは誰にでもわかるものであった。

その上でその意義というものを考えたい。実際意義は大きい。つまり、誰にでもアクセス可能な啓示というのが聖書宗教の啓示であった。それは言い換えると、聖書宗教における啓示は、特定の誰かを神懸かり的な人間に仕立て上げることを最終目標としているわけではない。神秘的な啓示に突き動かされる「単独者」というのではなく、啓示を重んじる人間集団、啓示を大切にす複数の人間からなる共同体を形成させる、これが今まで説明してきた聖書宗教の啓示論から導き出される一つの結論であると思われる。形成させるよう促すのが聖書宗教の啓示観の一つの帰結であるように思われる。これをレジュメでは聖書の啓示観は礼拝共同体の形成を人々に促すというように表現した。そもそもどうして人間の世界に宗教が芽生えたのかということに関して、よく聞く説明は、何か神懸かった個人が出現し、その人には当然カリスマが感じられるので人々がその人の元に集まってくる。こういう説明ならば、色んな宗教にほぼ共通してみられる現象であると思われる。しかし、聖書宗教においてはそういうカリスマを帯びた単独者というよりも、カリスマなどを分かち合おう、共有しようという共同体を形成しようという動機が強い。そこに一つの特色があるように思われる。個人の宗教性はもちろん大事だが、それよりも集団の宗教性が重んじられた。なぜかという、神懸かった特定の誰かにお伺いしなくても神の意図は理解可能であるから。

したがって、宗教意識の出発点からして、共同性というものが重んじられていたといえる。

今まで話してきたように、共同性を大事にしようとする宗教のメッセージがあったわけだが、それがより現実的な政治の問題に直面するとどういう言説が導き出されることになるのか。それを考えてみたい。結論から言うと、現世における単独者、例えば一人支配を行う国王といったような政治権力者の否定的な評価が啓示観から生じる。何故そうなのかというと、神を信じている民が作り出す人間集団においては、それが宗教的ユニットと見られようが、そういうユニットにおいては当然神のメッセージに基づいて秩序を形成して行かなくてはならないのだが、その神のメッセージは誰にでもわかるアクセス可能なものだからである。言い換えると、特定の誰かが、「俺は神の意志を知っている。神はこう秩序を形成しろと命じている。だから私はそれをリードするのだ。」というような導き方というのを、この宗教においては啓示観からして否定的に捉えざるを得ないのである。

まず最初にこういう啓示の見方、そしてその啓示の見方から導き出される宗教の共同性、そしてそれを演繹してくると最終的には王政批判に繋がるだろうといったが、その例をいくつか挙げる。例については聞き流していいらしい。レジュメ参照(C)。でも旧約聖書には、王政がそもそも神ヤハウェを奉じている宗教と齟齬を来すものであるとはっきりと書いてあることは重要。旧約聖書は、古代社会が当たり前という風に見なしてきた王政という政治社会のあり方を原理的に批判しようとしていた。そういうテキストに基づいて宗教が徐々に成立していくときに、その宗教のメッセージというものは後の政治思想に少なくとも影響を与えていくだろうことは言うまでもない。

II 「終末」の主張

A 聖書の終末思想、それを構成する理論的柱

——いづれも現世とそれを秩序付けるものを相対化

1 正義の神ヤハウェの直接的な歴史介入

- a 悪に対する裁きと救済
- b 意義：希望を持続させる。

2 黙示思想

- a 歴史の終わりの具体的様相に関心。その物語的叙述
- b 意義：精神主義化の回避(終末のリアリティ)

3 メシア論

II 「終末」の主張

A 聖書の終末思想、それを構成する理論的柱

——いずれも現世とそれを秩序付けるものを相対化

1 正義の神ヤハウェの直接的な歴史介入

- a 悪に対する裁きと救済
- b 意義：希望を持続させる。

2 黙示思想

- a 歴史の終わりの具体的様相に関心。その物語的叙述
- b 意義：精神主義化の回避(終末のリアリティ)

3 メシア論

- a 「油注がれた者」マーシーアハ(→Christus)
 - i 王/預言者/祭司への任職
 - ii 救世主：終末時に登場して、理想の統治を布く超越的な「為政者」
- b 意義：新約思想へ

前回も話したが、聖書の特徴付ける思想、もしくは契機として、終末意識というものがある。文字通り我々が生きているこの世が終わるのだという思想である。一口に終末意識というのをやめて、旧約聖書に則して、聖書宗教の終末論が、どういふサブレベルでの思想から構成されているのか。これを分析、説明していく。あらかじめ言ってしまうと、旧約聖書におけるいわゆる終末意識というのを成り立たせている理論的な柱は三つある。一つはヤハウェの直接的な歴史介入というアイデア、二つ目は黙示思想、三番目はメシア論というものである。これらの意義を含めて話していく。

まずは一つめ。ヤハウェの直接的な歴史介入。いうまでもないが、この聖書思想においては、歴史・現世というものはある時終焉を迎えるということを述べている。その際に、正義の神ヤハウェが現世に直接介入してきて悪を滅ぼす、こういうありがたいお話が旧約聖書の終末思想の一つの柱になっている。こういう言説の意義についてだが、正義の神ヤハウェが自ら悪を滅ぼす、これを言い換えると、悪に苦しめられていた人々の救済ということである。こういう思想が結局は虐げられた者のルサンチマン意識の表れだというようにニーチェに言われたことは言うまでもない。やはりヤハウェの歴史介入というアイデアには味わい深い者があり、例えば世界の終わり自体を語る思想であれば、それは聖書宗教だけに限らない。古代ゲルマンにもあつたりする。けれども聖書宗教の終末論は単なる世界の終わりではない。やはり正義が勝ち悪が滅ぼされる、それを待ち望もうというストーリー、人々に希望を抱かせようとする機能をこのストーリーが持っていた。

二番目、黙示思想。これは何かというと、歴史の終わりの時期の具体的様相に読者の関心を向けさせ、そしてそれを物語的に叙述する言説が黙示思想、黙示文学である。こういう言説が終末意識を構成している柱の一つである意義についてだが、現世が終わるとか、この世は永遠じゃないという考えは、往々にして過ぎゆく者にはあまり関わり合ふなという精神論、抽象的な処世観に還元されがちなものも確かである。しかしこれに関して、黙示思想にあるように、現世の終わり方を目に見えるように具体的に示す。それによって聖書宗教が終末の現実性を人々の心に深く気づかせようとした意義はあつたと思われる。リアリティがなかったら終末意識は単なる処世観になつていたかもしれない。それを救つたのがこの黙示思想という発想であると思われる。

三番目、メシア論。まず言葉の説明だが、メシアというのは古代イスラエルの言語の「マーシーアハ」に由来する。これは本来は油を降り注がれた者という意味を持っている。古代イスラエルにおいては、国王、預言者、祭司の任職式にあつて、その候補者に頭から油を注ぐという儀式があつた。特に、国王という為政者が油を注がれたメシアというように目された。そのことから転じて、今問題にしている現世の終わりにおいてパーフェクトなりそうな支配統治の行ふ超越的な為政者が登場するぞ、という思想が旧約聖書の後記になつて出てくる。こういう言説の意義は、まずこれを消極的に捉えるならば、まさにニーチェの言うとおりで、こういう思想自体が奴隷民族のルサンチマン意識を裏打ちするものだという言い方が出来る。しかし実は、救世主、理想的な為政者の規定の仕方次第によっては新たな思想を引き起こす可能性があるのだ。その一つに新約思想があるのである。まさに、メシア論の深まりを体現した人物としてイエスが規定できるのだ。それ故に、メシア論という終末思想を構成する一つの柱は、後の新約思想への柱としてやはり無視できない意義を持っていると思われる。

ではメシア論がどういふ発展をして、メシア論の中にあるポテンシャルリティはどのように花開いてイエスに繋

がってくるのか。新約聖書を構成するのか。

B メシア論のポテンシャルティ

1 悪に対する裁きと「共同性」との整合性？

a 独善性(勸善懲悪)は不可避？

b 悪者との共生/そもそも誰が悪か？

→ 悪を引き受けて、「共同性」を貫徹する者≒メシア

2 超越的かつ理想的な統治者のヴィジョン (イエス像へ)

→ 現世の政治権力(者)を相対化

さっきから終末意識は、正義が勝ち悪が減びるということを人々に知らしめる思想だと説明した。しかし、一方で旧約聖書は共同性というメッセージをも発信している。つまり、人と人とが一緒に生きることを尊ぶのが共同性のメッセージで、このメッセージを旧約聖書は一方で発信していた。ということは、悪との共生ということを考えなくて良いのだろうかという疑問が出てくるのである。

悪との共生は論外である。悪人には共同性という理論は適応されない。なので善人は悪が減ばされて行くのを高みの見物する。こういう独善的な考えに終末論は行き着くという例は多々ある。単純な勸善懲悪をもたらしかねない終末論のメッセージだが、それでもこれと共同性のメッセージの整合性を付けなければならぬとする。そうすると、さっき言ったようなメシア論の意義、ポテンシャルティが俄然高まってくる。

どういうことかということ、確かにヤハウェの正義は貫徹されるべきだし、その結果終末においてはヤハウェの正義が貫徹されて悪が減ばされるということもあるだろう。けれども、その悪に対しても共同性という理念は適用されているのではないだろうか。そもそもどうしてイスラエル民族は自分たちが善の側にあるというように決め込んで、相手側が悪だというように考えているのだろうか。イスラエル民族自身がヤハウェの正義によって滅ぼされる悪ではないのか。果たしてそんなことが言い切れるのか。こういうことが旧約後記、新約全段に書かれている。

そこで、歴史からわかることは、ヤハウェは何度もイスラエル民族の悪を裁いてきた。しかし、そういう自分たちをヤハウェは滅ぼし尽くすことはしなかった。むしろ、そういう悪に他ならないイスラエル民族と共に生きようとしてきたのが、神ヤハウェではなかったか。そのことに旧約後記の思想家、新約前段の思想家が気づいたときに、次のような結論が出てきた。終末においてなされる悪の裁きにおいても共同性の理念は貫徹されるべきであろう。だとすると、悪を悪として割り引くことなく認める。けれどもその悪を我が身に背負って、悪を自分自身で引き受けて取りなしをする者が終末に出現するのではないのか。そういう者こそが、つまり正義という者を少しも犠牲にすることなく、悪との共生をも実現するような統治者こそが本来のメシアなのだ。こういうことを自覚して世に登場してきたのがイエスである。

極めて理想的な世界の統治者というビジョンをメシア論は旧約後記以降人々に植え付けてきたわけだが、その際に悪を単に悪だから罰するのではなく、人々が背負ってあえいでいる悪・罪を代わって自ら引き受ける統治者というものがここでは謳われている。それに照らし合わせるならば、現世の統治者はどんなに善政を行っていても、やはり相対化される。

そして、メシア論、メシア論を柱とする終末論が鋭い為政者批判のインスピレーションを人々に与えていくだろうことは容易に想像がつく。こういう理想の統治者といったビジョンを最終的に示すテキストを講じて成りなっていくキリスト教という宗教が、ヨーロッパ中世においてどういう政治思想を発信していくのか。これが来週以降のお話。